調査報告

宇都宮大学地域デザイン科学部研究紀要『地域デザイン科学』第 11 号 49-62

新型コロナウイルス（COVID-19）パンデミックによる大学生の行動様式の変化

――2021 年度宇都宮大学地域デザイン科学部「社会調査実習」成果報告――

Behavioral Changes of the University Students during the COVID-19 Pandemic

鈴木　富之[1]・伊藤　舞衣[2]・印南　絵梨[2]・
田代　凪[2]・小倉　秀斗[2]・白金　励大[2]・田中　吏規[2]
SUZUKI Tomiyuki, ITO Maui, INNAMI Eri,
TASHIRO Nagi, OGURA Hideto, SHIROGANE Reo, TANAKA Riki

本稿の目的は、宇都宮大学生を事例として、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）蔓延の前後における大学生の生活様式の変化について、①日常生活、②消費行動、③観光行動の 3 点に注目して明らかにし、その変化が生じた要因について考察することである。

①日常生活の変化をみると、通学などの時間がなくなったが、毎週課題の提出を求められる、友達や家族と直接会ってのコミュニケーションが取れないなどの影響が出た。

次に、②消費行動の変化では、服や外食の支出において減少の割合が高かった。一方でゲームや有料動画サイト、自炊の食費、本の支出において増加の割合が高かった。いわゆる「巣ごもり需要」によるものだと考えられる。また同様に貯金も増加の割合が高かった。

最後に、③観光行動についてみると、コロナ前の主な旅行先は千葉県をはじめとする南関東であったのに対して、コロナ後の旅行先の約半数が栃木県をはじめとする北関東であった。また、5 人以上の旅行が大きく減少した。

キーワード：新型コロナウイルス感染症（COVID-19）、新しい行動様式、オンライン授業、緊急事態宣言、 観光行動、マイクロツーリズム

Ⅰ．はじめに

本稿は 2021 年度に実施された、宇都宮大学地域デザイン科学部「社会調査実習Ⅰ・Ⅱ」の成果について報告するものである。

新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の拡大プロセスをまとめた黒木（2021）によると、日本で最初の感染者は、2020 年 1 月 14 日に中国・武漢から帰国した男性であった。1 月 23 日には武漢が都市封鎖されたため、日本政府が邦人を帰国させるためのチャーター機の派遣を行った。2 月 3 日、横浜港に入港したクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」の船内で集団感染が発生

1　宇都宮大学地域デザイン科学部講師　t.suzuki@cc.utsunomiya-u.ac.jp
2　宇都宮大学地域デザイン科学部学部生

した。2 月中旬から 3 月にかけて、ヨーロッパ留学から帰国した学生や旅行者などからヨーロッパ型ウイルスが持ち込まれたとされる。こうした状況下、4 月以降に緊急事態宣言が複数回発令され、日本人の行動様式に大きな変化が生じることとなった。大学では対面授業が自粛され、オンライン授業が導入された。それに伴い、大学生の日常生活や消費行動にも変化が生じた。観光行動に注目すると、星野リゾートの星野佳路氏が提唱する「マイクロツーリズム[1)]」（3 密（密閉、密集、密接）を避けながら地元の方が近場で過ごす旅のスタイル）を実践する学生が多くみられた。

私たちは、本調査を通じて宇都宮大生を対象として、COVID-19 パンデミック前後における大学生の行動様式の変化の把握を目指した。学生、そして指導をした我々も全力で取り組んだ調査だが、いまだ不十分な箇所が見られるかもしれない。読者諸氏の忌憚のないご意見を賜れれば幸いである。なお、本稿は Ⅰ を鈴木富之、Ⅱ・Ⅲを白金励大、Ⅳを田中吏規、Ⅴ-1 を田代　凪、Ⅴ-2 を印南絵梨、Ⅵを伊藤舞衣、Ⅶを小倉秀斗の担当で執筆した。アンケートの集計と作図については伊藤、印南、小倉、白金、田代、田中が担当した。

Ⅱ．研究の背景と目的

2020 年代以降、COVID-19 の世界的な蔓延により、対応・対策をとらざる負えない状況にある。2020 年 4 月 7 日の第 1 回緊急事態宣言をはじめにして、2021 年 1 月 8 日に第 2 回、4 月 25 日に第 3 回緊急事態宣言が発令された。そして 2021 年 7 月 12 日に第 4 回緊急事態宣言が出され、9 月末まで宣言期間が延長された。2022 年 1 月現在において、COVID-19 ワクチンの接種 2 回目が全国的におおむね完了している。このような現状において、大学生はどのような行動変容があるのだろうか。

大学生の行動様式に着目した研究は以下の通りである。伊藤ほか（2020）によると、1 人で生活している下宿生が大きなストレスに耐えてきている状況や、勉学や将来への不安だけでなく、コロナ禍による収入面への不安や自粛生活でのストレスを抱える学生の多さも明らかになっている。小浜（2021）は、メディア媒体での学習は自分の伝えたいことを正しく相手に伝え、その伝えたいことを相手にストレスなく受け取ってもらうことは容易なことではないことを指摘している。山根ほか（2021）によると、遠隔授業の実施に対し、授業の質、通信環境や実施方法に不安が高かった。また、学生は金銭面に対し不安感が高い傾向にあり、大学への要望でも「経済的援助の充実」が最も高かった。さらに、大学生活に関する学生の不安感には学年差が認められ、就職活動に関しては学年が高くなるほど、インターンシップについては 3 年生で高かった。加えて対面授業開始後の COVID-19 への感染対策に対する不安は 2 年生が最も高かった。

一方、大学生の旅行意欲に関する研究として、河内（2021）が挙げられる。河内（2021）によると、回答者の過半数は旅行意欲がなく、その理由は「感染する可能性があるから」が 43.6%で最多

を占めたことや、旅行意欲が高まる要素として「ワクチンが開発されたら」が最も多かった。

このように、COVID-19 の蔓延やそれに伴う自粛行動が大学生の行動様式に影響を与えていると考えらえる。

本研究の目的は、宇都宮大学生を事例として、COVID-19 蔓延の前後における大学生の生活様式の変化について、①日常生活、②消費行動、③観光行動の 3 点に注目して明らかにし、その変化が生じた要因について考察することである。

Ⅲ. アンケート調査の概要

本調査は、執筆者 6 名を除く宇都宮大学地域デザイン科学部コミュニティデザイン学科 3 年生 43 名を対象にアンケートを用いて実施した。回答期間は 2021 年 5 月 13 日～6 月 1 日である。

質問事項は、日常生活、消費行動、観光行動、交友関係など全 13 問質問をした。なお、本稿ではコロナ蔓延前後の定義として 2020 年 3 月以前を「コロナ前」、全国に緊急事態宣言が発令された 2020 年 4 月以降を「コロナ後」とする。

アンケート回答者の属性は、男性 18 名、女性 25 名であり、女性の割合が高い。居住形態では、下宿が 23 人、実家暮らしが 20 人となっている。

Ⅳ. COVID-19 パンデミックにおける学生の日常生活

図 1 は、日常生活における時間の使い方の変化を示したものである。増えたと回答した割合が高かった項目は「動画・音楽視聴」と「課題」で、回答者全体の 80%以上を占めていた。とくに、「課題」に関しては 90%を超える人が増えたと回答した。また、「電話」「移動時間」「ゲーム」「料理」「アルバイト」「漫画」は 50%前後が増えたと回答している。

一方、減ったと回答した割合が高かった項目として「サークル・部活動」が約 80%、「旅行」は約 70%、「遊び」は約 50%を記録した。変わらないと回答した人が多かったのは「筋トレ」「ジム」「散歩」「オンライン購入（日用品・食料品）」「オンライン購入（洋服・装飾品）」「店頭購入（日用品・食料品）」「店頭購入（洋服・装飾品）」「漫画」などで、いずれも 50%程度またはそれ以上となっている。

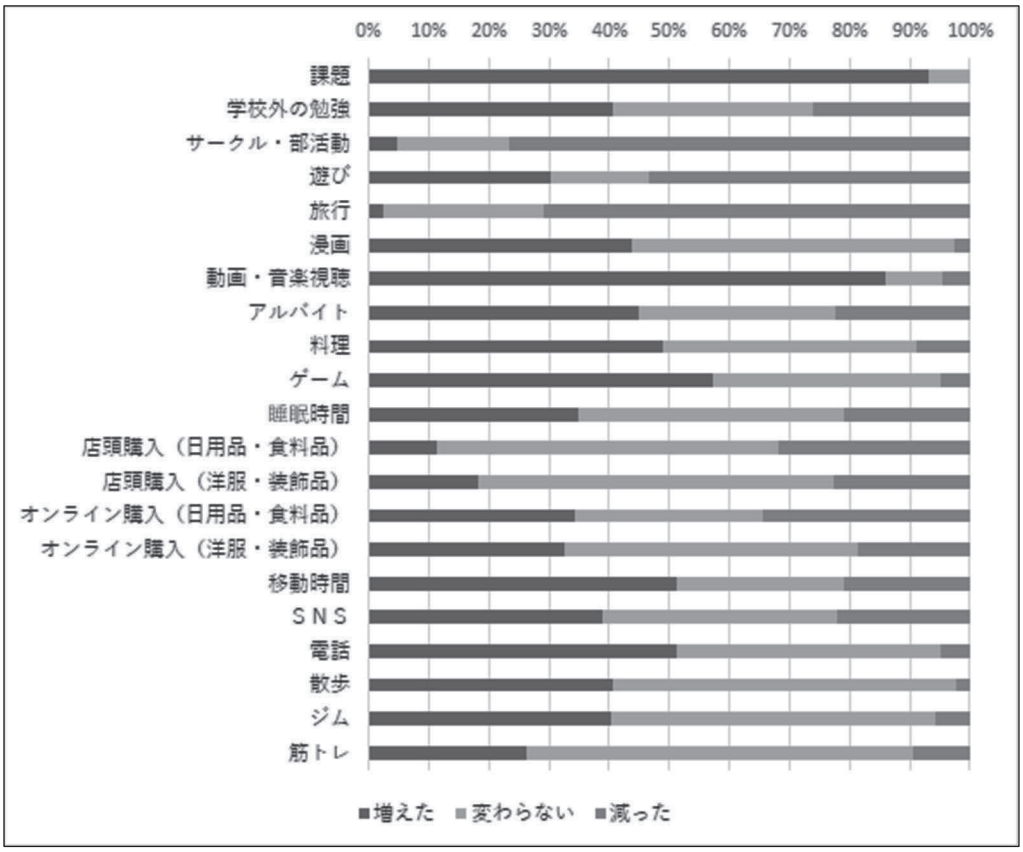


図１　日常生活における時間の使い方の変化（N＝43、各項目の割合は「未回答」を除いたものである）
（アンケート調査により作成）

図 2 は、コロナ前と比較してストレスになった要因の集計結果である。「大学の友達と会うことができない」がストレスを感じている学生 35 人中 33 人、「課題が多い」が 31 人、「外出・旅行ができない」が 28 人、「イベントに参加することができない」が 24 人、「マスク着用」が 21 人、「オンライン授業が増えた」が 20 人、「部活・サークルができない」が 18 人、「地元の友達に会うことができない」が 16 人、「大学に行くことができない」が 13 人、「帰省ができない」が 12 人となった。「バイトができない」が 3 人、「家族といる時間が増えた」が 1 人であり、「外食に行けず自炊が増えた」と回答した学生はみられなかった。

図 3 は、コロナ後におけるストレス発散方法の集計結果である。「動画視聴」が 35 人中 27 人と最も多く、次いで「人と話す」が 25 人、「寝る」が 24 人、「食べる」が 22 人、「歌う」が 18 人、「ゲーム」が 17 人、「漫画」が 11 人、「散歩」が 8 人、「料理する」と「筋トレ」が 5 人、「ジム」が 2 人となった。

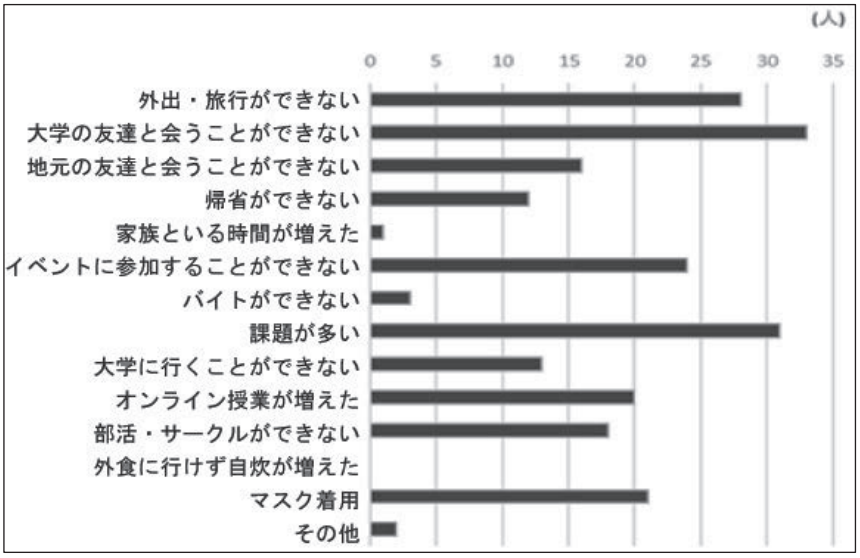


図2　コロナ前と比較してストレスになった要因（N=35）

（アンケート調査により作成）

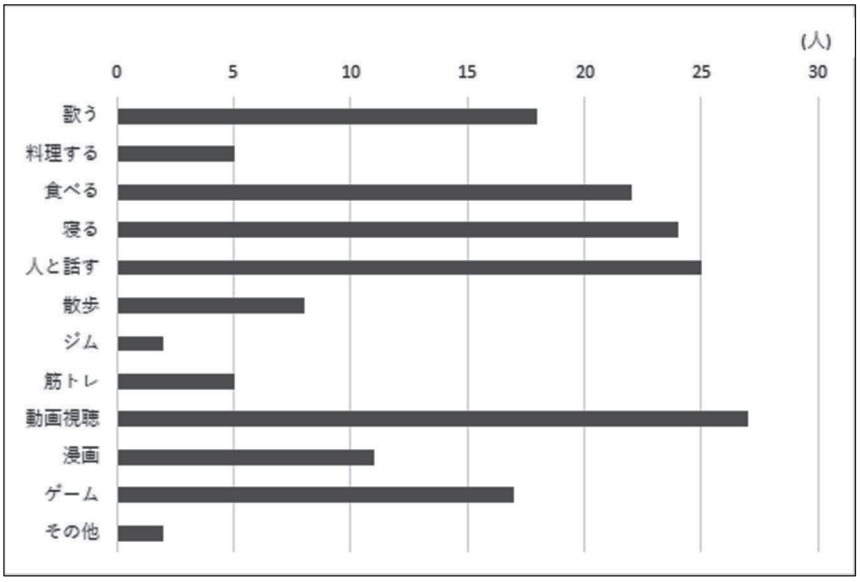


図3　コロナ後におけるストレス発散方法（N=35）

（アンケート調査により作成）

V．COVID-19 パンデミックにおける学生の消費行動

1．アルバイト

図 4 は、COVID-19 感染拡大前後のアルバイト先の変化を示したグラフである。回答者全体の 55.8%が「変わってない」と回答した。アルバイトを辞めたり、アルバイト先を変えたりするという変化があった学生が全体の 25.6%、アルバイト先を増やした学生が 18.6%であり、計 44.2%の学生が変化があったと回答した。

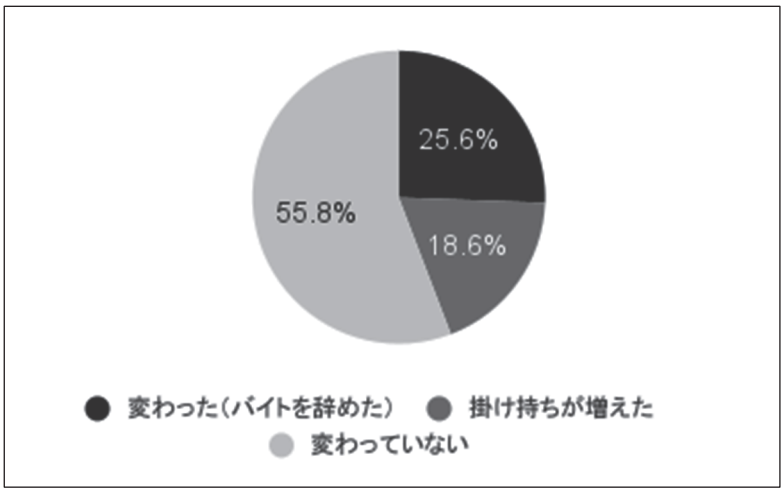


図 4　COVID-19 感染拡大前後のアルバイト先の変化（N=43）

（アンケート調査により作成）

図 5 は図 4 で「変わった（バイトを辞めた）」と回答した学生を対象としてコロナ前のアルバイト先を表したものである。回答が最も多かったのは「その他」（11 人中 4 人）であったが、次いで「飲食店（居酒屋除く）」「単発バイト」「アパレル系」の 3 つが多く、いずれも回答者数は 2 人だった。目立った傾向はなく、幅広い業種でアルバイトがなされていたことがわかる。

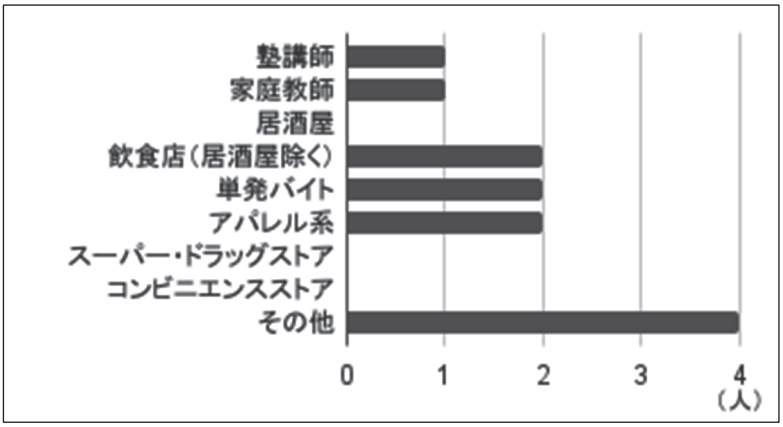


図 5　コロナ前のアルバイト先（N=11）

（アンケート調査により作成）

図 6 は図 4 で「変わった（バイトを辞めた）」と回答した学生を対象としてアルバイト先を変えたり辞めたりした理由を表したものである。最も回答が多いのは「その他」（11 人中 6 人）であるが、次いで「コロナによるシフト減」を 3 人が理由に挙げており、「コロナによる解雇」と回答した学生（1 人）も存在した。

図 7 はコロナ後のアルバイト先を調査したものである。「居酒屋を除く飲食店」が回答者全体の

43 人中 12 人で、最も多い事が読み取れる。次いで、塾講師（8 人）や居酒屋（6 人）などもアルバイト先として選ばれている。その他の回答には、本屋、映画館、眼鏡販売店、CD ショップ（それぞれ 1 人）など趣味に関わる仕事が多かった。

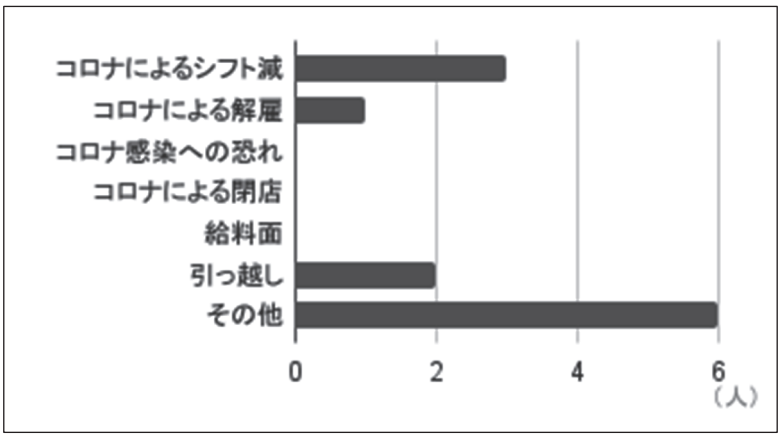


図 6　アルバイト先を変えたり辞めたりした理由（N=11）

（アンケート調査により作成）

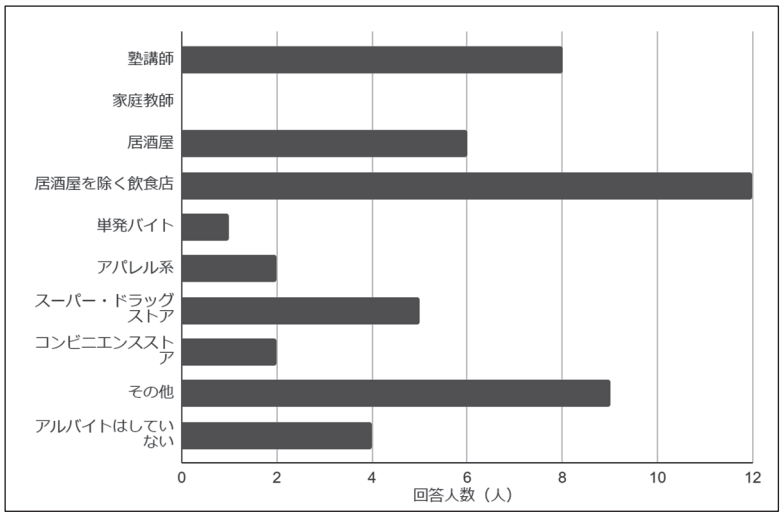


図 7 コロナ後のアルバイト先　(N=43)

（アンケート調査により作成）

2. 消費行動

図 8 はコロナ前とコロナ後における消費金額の増減を示したものである。この図から、「貯金」「ゲーム」に関しては回答者全体の約 50%が増えたと回答した。「有料動画サイト」「自炊の食費」「本」に関しても、回答者全体の 30%以上が増加傾向にある。「筋トレグッズ」「家電」に大きな変化はみられない。一方で、「外食」が減少したと回答した学生は約 50%であった。

図 9 は、コロナ前とコロナ後における収入の変化について調査したものである。「増加した」「変化してない」「減少した」の項目は、ほぼ同じ割合であった。

図 10 は収入に変化のあった学生を対象に、収入の変化の理由を尋ねたものである。最も大きな要因としてアルバイトの増減（26 人）が挙がっている。次いで、仕送りの増減（3 人）、奨学金の増減（1 人）の順に回答者が多かった。

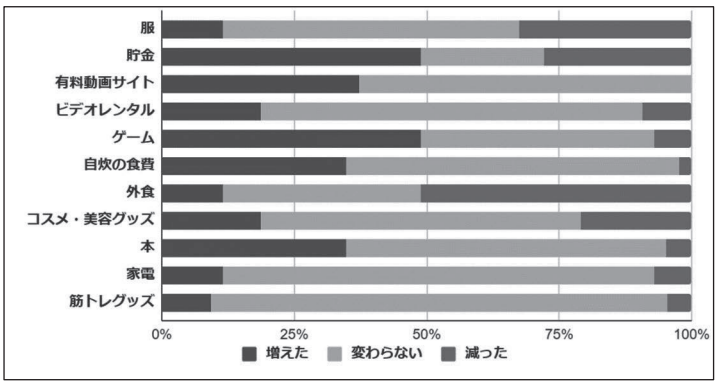


図 8　コロナ前とコロナ後における消費金額の増減　(N=43)

（アンケート調査により作成）

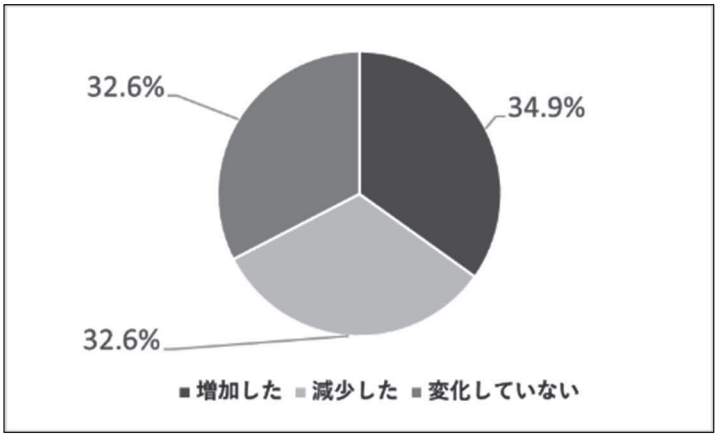


図 9　コロナ前とコロナ後の収入の変化（N=43）

（アンケート調査により作成）

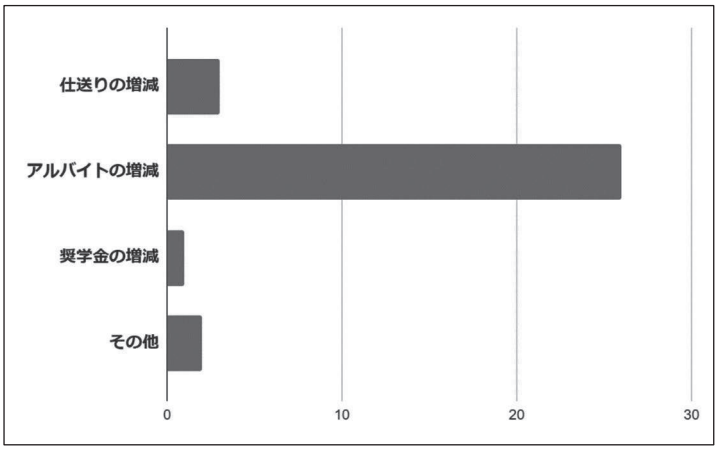


図 10　収入変化の理由（N=32）

（アンケート調査により作成）

VI. COVID-19 パンデミックにおける学生の観光行動の比較

図 11-a は回答者のコロナ前の旅行地を表したものである。コロナ前の最も多い旅行地は千葉県であり、延べ旅行回数 149 回のうち 31 回と回答された。東京都、千葉県、神奈川県が全体の約 44%を占めており、南関東への観光が多いことがわかる。全体でみると比較的遠方まで観光に行くことも多く、東日本は満遍なく観光されているのに加え、西日本では大阪府、京都府への観光もみられた。

図 11-b は回答者のコロナ後の旅行地を表したものである。最も多い旅行地は栃木県であり、延べ旅行回数 89 回のうちが 22 回と回答された。栃木県、群馬県、茨城県が全体の約 48%を占めており、北関東での観光が多いことがわかる。全体でみると遠方まで観光に行くことが少ない。

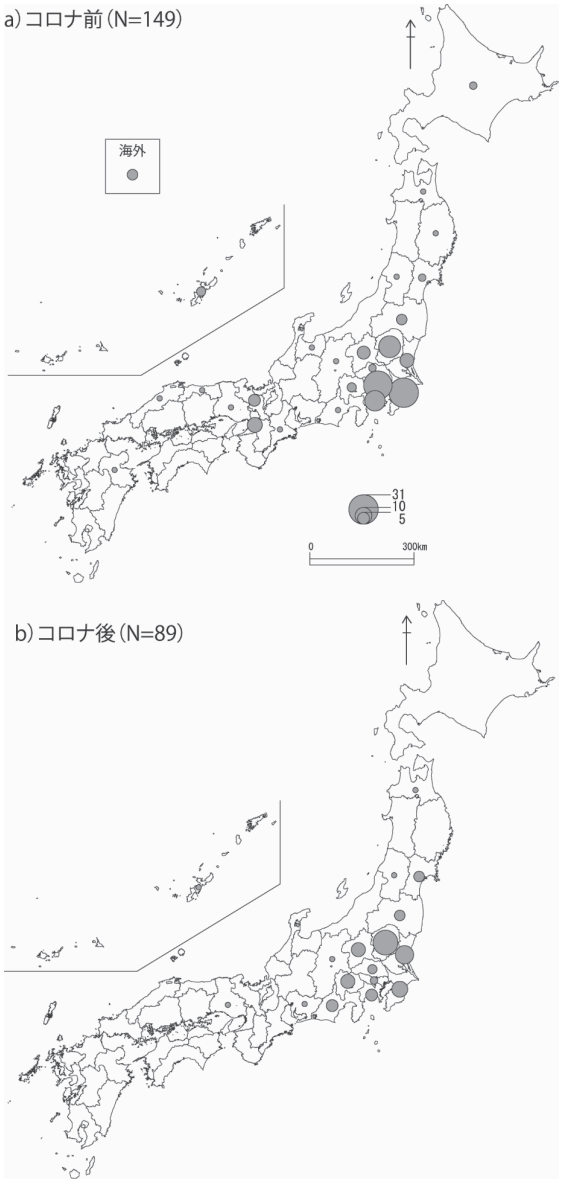


図 11　コロナ前とコロナ後の旅行先

（アンケート調査より作成）

図 12 はコロナ前の観光への同行人数を表したものである。「2 人」と「4 人」と回答した学生がそれぞれ 149 組中 40 組、36 組と圧倒的に多い。また、「10 人以上」の大人数での観光もみられた。

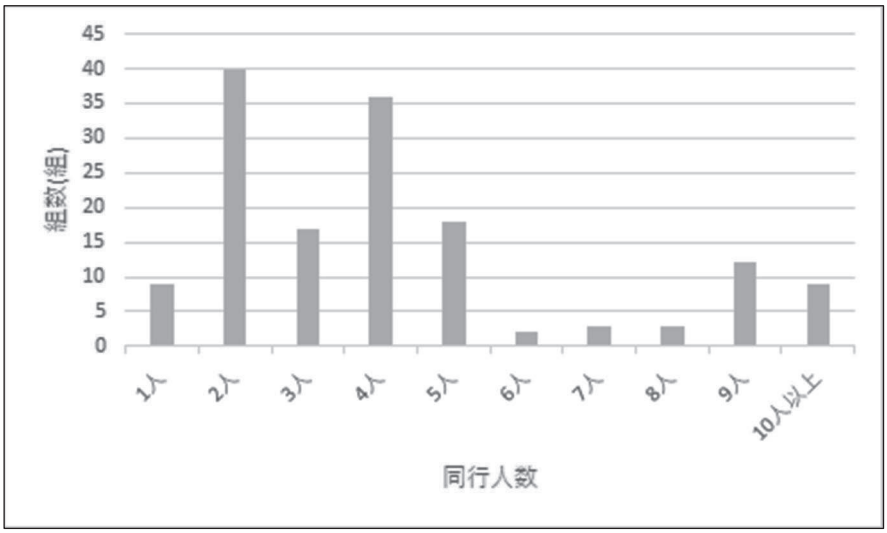


図 12　コロナ前の旅行同行人数（N＝149）

（アンケート調査より作成）

図 13 はコロナ後の観光人数を表したものである。「2 人」が 89 組中 44 組と最も多く、他の観光人数に大きな差をつけた。コロナ前に比べ、「2 人」以外はすべて減少した。6 人以上の観光はほとんどなく、少数での観光がメインになったことがわかる。

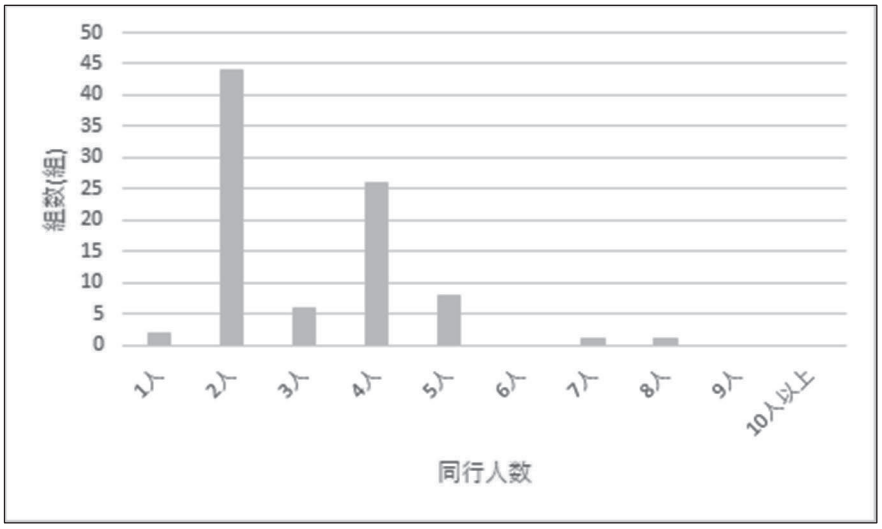
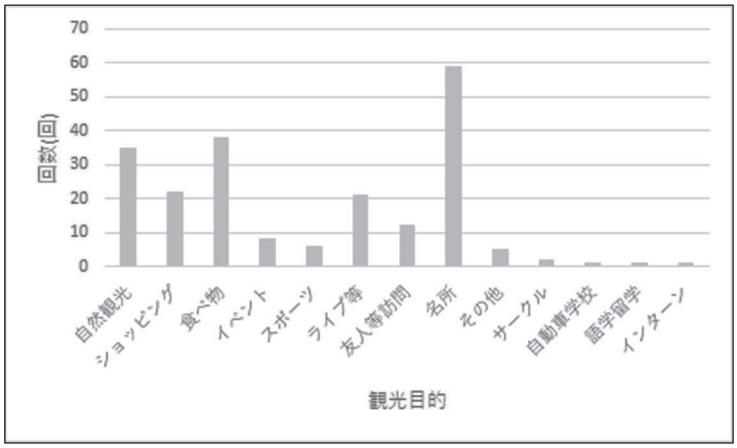


図 13　コロナ後の旅行同行人数（N＝89）

（アンケート調査より作成）

図 14 ではコロナ前の観光目的を示している。「名所」が 149 回中 59 回と最も多く、次いで「食べ物」「自然観光」と続いている。「ライブ等」「イベント」「スポーツ」も少ないながら一定の需要があることがわかる。比較的さまざまな目的で観光されていることがわかる。

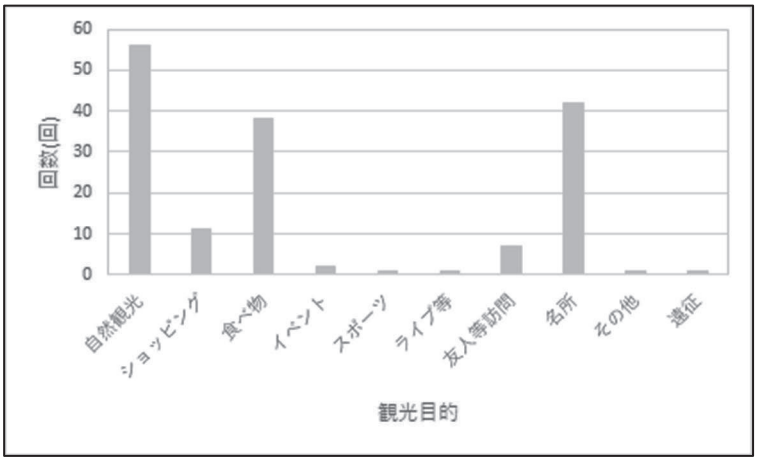


注）「その他」の内訳は、「サークル」「自動車学校」「語学留学」「インターン」である。

図 14　コロナ前の観光目的（N=149）

（アンケート調査より作成）

図 15 ではコロナ後の観光目的を示している。3 密を回避できる「自然観光」が 89 名回 56 回と最も多く、次いで「名所」、「食べ物」と続いた。一方で、それ以外の観光目的が圧倒的に低下している。とくに「イベント」「スポーツ」「ライブ等」はほとんどみられない。これはそもそも開催されていないことや開催されても大都市での開催が多くなかなか移動できないことが原因であると考えられる。



注）「その他」のうち内訳は「遠征」である。

図 15　コロナ後の観光目的（N=89）

（アンケート調査より作成）

図 16 ではコロナ前の観光時の移動手段を示している。「電車」が 149 回中 76 回と最も多く、他と大きな差がある事がわかる。図 11 から南関東への旅行が多かったため、電車での移動が多いと考えられる。

図 17 ではコロナ後の観光時の移動手段を示している。「自家用車」が 89 回中 29 回、「レンタカー」が 28 回と、自動車の利用が増えていることがわかる。図 12 から北関東への旅行が多かったことから近場であり電車でのアクセスが良くないことや 3 密を避けることから自動車利用が増加したと考えられる。

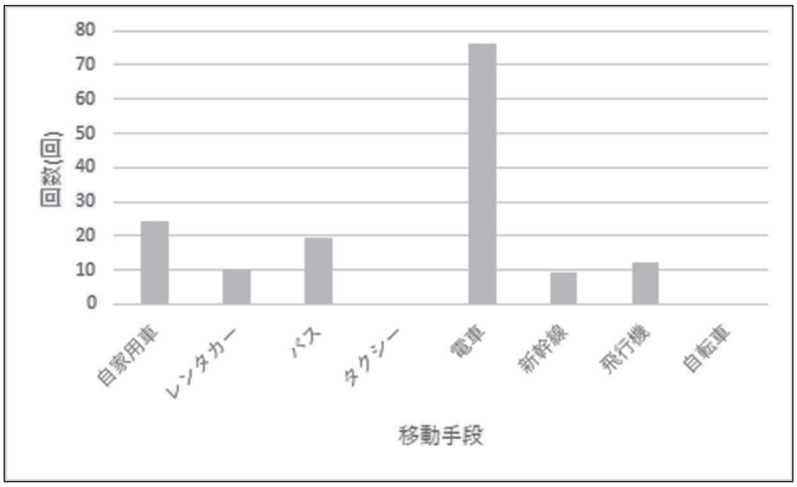


図 16　コロナ前の観光における移動手段（N=149）

（アンケート調査より作成）

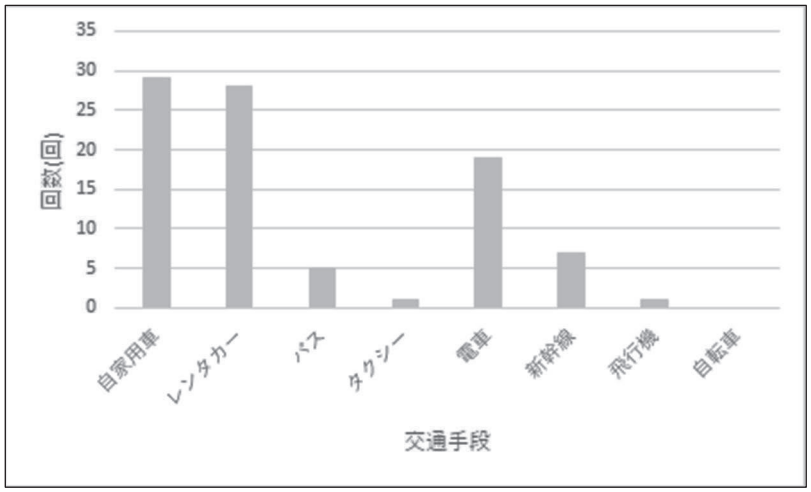


図 17　コロナ後の観光における移動手段（N=89）

（アンケート調査より作成）

Ⅶ. おわりに

本研究では、宇都宮大学生を事例として、COVID-19 蔓延の前後における大学生の生活様式の変化について、①日常生活、②消費行動、③観光行動の 3 点に注目して明らかにしてきた。最後に、大学生の生活様式が変化した要因について述べる。

日常生活の変化をみると、対面授業がオンライン授業に変更になった。これは大学生の生活を根底から変化させる大きな要因となったといえる。そのため、通学などの時間がなくなったが、毎週課題の提出を求められる、友達や家族と直接会ってのコミュニケーションが取れないなどの影響が出たと考えられる。以上のような変化が、大学生にとって大きなストレスになっていたことが読み取れる。

次に消費行動の変化をみる。アルバイトに着目すると、バイトが変わった・バイトを辞めたと回答した学生が多かったのは「居酒屋以外の飲食店」、「単発バイト」、「アパレル系」の 3 つであった。これらの業種は 2020 年 4 月および 2021 年 1 月に栃木県に発令された緊急事態宣言の影響を受けたと考えられる。これらの期間においては、飲食店・商業施設の休業・営業時間の短縮、イベントの中止などがなされた。また国や行政から、不要不急の外出の自粛が叫ばれていた。上記の職種はこれらの影響を最も強く受けた職種といえるだろう。支出先という面でみると、服や外食の支出において減少した割合が高かった。これは大学の授業形態が、オンライン授業に変化したことで日常的な外出の機会が減少したことに起因すると考えられる。

一方でゲームや有料動画サイト、自炊の食費、本の支出において増加の割合が高いということがわかる。この背景として、先述した緊急事態宣言等の影響により、家において過ごす時間が増えたことが考えられる。いわゆる「巣ごもり需要」によるものであると考えられる。また、貯金も増加の割合が高かったが、これは全体的には支出が減り、貯金に回す余裕が来た人一定数いることによると考えられる。

最後に、観光行動の変容をみる。コロナ前の主な旅行先は千葉県をはじめとする南関東であったのに対して、コロナ後の旅行先の約半数が栃木県をはじめとする北関東であった。これにも緊急事態宣言が大きく影響していると考えられる。とくに、東京をはじめとする 1 都 3 県には、アンケートの対象期間だけでみても、2020 年 4 月および 2021 年 1 月の 2 回にわたって緊急事態宣言が発令された。その他の期間においてもまん延防止等重点措置も発令されていた。これによりテーマパークも休園・人数制限を行い、ライブなどのイベントも中止となったことが大きく影響しているとみられる。また、5 人以上の旅行が大きく減少したことがわかる。この背景には、感染予防の徹底により大人数での行動の自粛が訴えられていることがあると考えられる。これは移動手段の変化でも同様のことがいえるだろう。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、宇都宮大学地域デザイン科学部コミュニティデザイン学科 4 期生の皆様にアンケートのご協力をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

なお、本稿では、日本学術振興会（JSPS）科学研究費助成事業若手研究「人口減少社会下の首都圏外縁部における観光地域の衰退とその再生戦略に関する研究」（課題番号：21K17971、研究代表者：鈴木富之）の一部を使用した。

注

1）星野リゾートホームページ「星野リゾートの「マイクロツーリズム」ご近所旅行のススメ」（https://www.hoshinoresorts.com/sp/microtourism/、最終閲覧日 2022 年 3 月 24 日）

参考文献

伊藤美奈子・栗本美百合・白水倫生 2020. コロナ禍による大学生のストレスと大学生活への意識. 人間文化総合科学研究科年報 36：25-37.

小浜朋子 2021. コロナ禍における「コミュニケーションのユニバーサルデザイン」に関する考察—SUAC の学生レポートの分析から. 静岡文化芸術大学研究紀要 21:77-80.

河内良彰 2021. 新型コロナウイルス感染症の蔓延下における大学生の旅行意欲と観光行動に関する調査研究. 社会学部論集 72：21-40.

黒木登志夫 2021.『新型コロナの科学—パンデミック、そして共生の未来へ（第 5 版）』中央公論新書.

山根真紀・大宮ともこ・石井智也・住田　健 2021. 新型コロナウィルス感染症（COVID-19）感染拡大における学生の健康及び生活に関する調査報告. 日本福祉大学スポーツ科学論集 4:65-73.